

〔論文〕

## 相互作用を促進する要因としてのビブリオバトルの可能性

城 野 博 志

名古屋学院大学経済学部

### 要 旨

読書活動の新たなスタイルとして近年その注目を集めているのがビブリオバトルである。ビブリオバトルとは、自分のお気に入りの本を持ち寄り、その魅力を伝える書評ゲームである（谷口，2013）。読み聞かせやブックトークなど従来型の書評伝達機能に、ゲーム性とプレゼン性が加味されている。ビブリオバトルは当初から「読書量を増やす」目的ではなく、むしろコミュニケーションや人間関係を深めるための仕掛けから生まれた。ビブリオバトルの創始者である谷口自身は、ビブリオバトルを書評の相互作用が生み出す語りのメディアとして位置付けている（谷口，2010）。ビブリオバトルと言うと「チャンプ本」を選ぶ過程にばかり着目されるが、その相互作用を生み出す側面にも焦点が与えられるべきであろう。本稿では、相互作用を促進する要因としてのビブリオバトルの可能性を考察してみたい。

キーワード：相互作用，ビブリオバトル，多読

## Potential of bibliobattle as a factor of promoting interaction

Hiroshi SHIRONO

Faculty of Economics  
Nagoya Gakuin University

## 1. ビブリオバトルとは

ビブリオバトルとは、自分のお気に入りの本を持ち寄り、その魅力を伝える書評ゲームである（谷口，2013）。読み聞かせやブックトークなど従来型の書評伝達機能に，ゲーム性とプレゼン性が加味されている。すなわち，発表後に参加者全員が最も読みたくなった本に一人一票ずつ投じてチャンプ本を選ぶというゲーム性と5分に制限された発表時間とそれに続く発表に関する2分間の質疑応答というプレゼン性を一つの特徴とする。また，発表内容に関する質疑応答により，発表者は参加者からフィードバックを得ると同時に，参加者も発表者の作品に関する見方や考え方を共有することができる。そうした意味で，吉野（2014）に言わせれば，ビブリオバトルは「人を通じて良い本に多く出会える」という本の楽しみ方を可能にするだけでなく，読書というパーソナルな行為を他人との双方向のコミュニケーションへとつなぐ。

ビブリオバトルの原型は立命館大学教授の谷口忠大氏が京都大学大学院情報学研究科システム科学専攻共生システム論研究室の研究員として在籍していた2007年にゼミの輪読会で生まれている（谷口，2013）。吉野（2014）によれば，その設計の視点は，広範な研究範囲から必要な知識をいかにして効率的に得ていくか，参加するメンバーが有している多様な関心をどうやって共有するか，書籍を通じた情報共有をどうやって無理なく続けるか，にあった。ビブリオバトルは当初から「読書量を増やす」目的ではなく，むしろコミュニケーションや人間関係を深めるための仕掛けから生まれた。その後，発表のルールを作り，改良を重ねながら，現在の形へと至っている。

ビブリオバトルの公式サイトによれば，ビブリオバトルは以下の公式ルールをもつ。

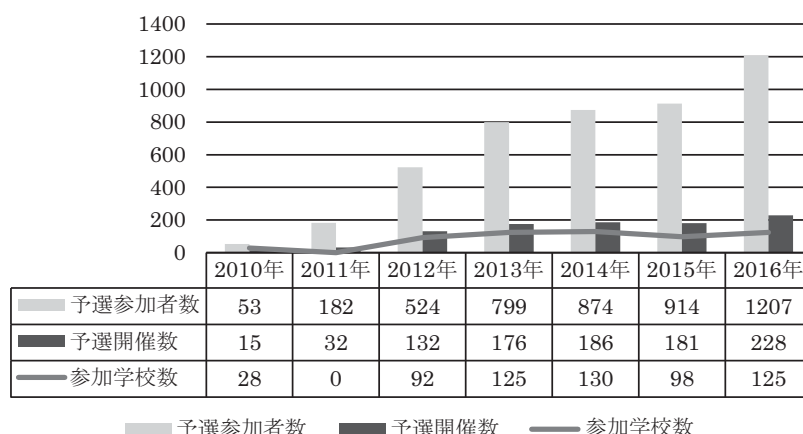
- ①発表参加者が読んでおもしろいと思った本をもって集まる。
- ②順番に一人5分で本を紹介する。
- ③それぞれの発表の後に参加者全員でその発表に関するディスカッションを2～3分行う。
- ④全ての発表が終了した後に「どの本が一番読みたくなったか？」を基準とした投票を参加者全員一票で行い，最多票を集めた本を「チャンプ本」とする。

ビブリオバトルはその後，2010年ごろから全国各地へと広がりを見せて，各種の教育機関においても実践が行われつつある。

## 2. 教育現場におけるビブリオバトルの広がり

近藤・大賀・山下（2015）は，ビブリオバトルが教育機関に広がったのは，2010年の東京都による『言葉の力』再生プロジェクトがビブリオバトルの採用を契機とすると考える。大学生にとって最大規模のイベントである「ビブリオバトル首都決戦」<sup>1</sup>の発表者は2010年には53名であったものが，2016年には1207名と飛躍的に増加している（ビブリオバトル普及委員会事務局調べ2017.7.25現在）。

表1 ビブリオバトル首都決戦のデータ



伊藤（2017）によれば、大学の正課の授業として取り込まれたのは大阪大学の基礎セミナーで2011年のことであった。それ以降、各地の大学でビブリオバトルを授業に組み込む試みがなされてきた。皇學館大学では学内の国文学会や研究室や1年生向けの授業で、佐賀大学では1年生向けの「技術文章作成」授業内で、室蘭工業大学では留学生向けの日本語授業「プレゼン入門」でビブリオバトルが採り入れられている。

### 3. 多読の読後課題としてのビブリオバトルに関する先行研究

大学の授業にビブリオバトルが最初に取り込まれたのは2011年で、今年で7年目を迎え、実践はますます広がりを見せつつある。一方、多読の読後課題としてビブリオバトルが導入されたのはここ2～3年のことで、実践が始まってまだまだ日が浅い。

竹村（2016）は多読後の発話活動としてビブリオバトルを実践している。短大生121名を対象に10分の授業内多読終了後にビブリオバトルが始まる。一人2分のもち時間で1回の授業で5名が発表を行い、発表終了後に参加者全員がチャンプ本を投票する。さらに2016年度からは、自分の発表の様子を他学生からスマートフォンで撮影録画してもらい、フィードバックとして活用する試みを始めている。6件法のアンケートの結果、8割の学生がビブリオバトルの継続を希望していることが判明している。

藤井（2017）は英語多読の読後に行うアウトプット活動としてミニ・ビブリオバトルを紹介している。高専生3年生1クラス46名を対象に、2016年度の前後期で各1回ずつ（9月と2月）、英語でミニ・ビブリオバトルを合計2回実施している。1回の発表までに、「準備」、「オリエンテーションと選書」、「原稿作成と発表準備」、「ビブリオバトルと省察」の4つの指導段階を踏ませた。参加者は第3段階で原稿準備と音読練習に携わる。原稿はまず日本語で作成し、それを300語程度の英文原稿に書き換える。第4段階に進む前に、原稿は一旦回収され、エラーの訂正後に返却

され、その後音読練習と暗証練習を自宅で行ってから、最終段階を迎える。ビブリオバトル終了後のアンケートでは70～90%の学生がビブリオバトルを楽しんでいる様子がうかがえたと報告している。藤井はビブリオバトルが多読のアウトプット活動として一つの選択肢となりえると結んでいる。

藤田（2018）は多読授業におけるミニ・ビブリオバトルの可能性を探索している。授業の一部を多読授業のブックレポートとして、日本語によるミニ・ビブリオバトルを行った結果、次の4点が明らかとなった。

- ①内容についての構想を事前に考えさせる大切さ
- ②新しい本との出会いと深い読みを促進する
- ③他人からの学びを可能とする
- ④ビブリオバトルに積極的な学生と消極的な学生との意識の違い

以上の結果から、藤田はビブリオバトルを英語教育に活用する有効性を結論付けている。

#### 4. ビブリオバトルと相互作用

谷口（2010）は、ビブリオバトルを書評の相互作用が生み出す語りのメディアとして位置付けている。すなわち、ビブリオバトルは発表者が本の内容を紹介するだけの一方向のコミュニケーションに留まらず、参加者全員からの発表内容に関する質問に答えることを通してフィードバックを貰うという双方向のコミュニケーションを特徴とする。発表者は質疑応答を経ることによって作品の内容理解をより高次なものに高めることができる。それと同時に、参加者も作品に対する発表者の思いに共感を寄せたり、新たな読みの視点に触れたりすることが可能となる。

小島（2016）はビブリオバトルを多読に導入した授業で、ビブリオバトルに内在化する相互作用を実感している。小島は、多読授業にビブリオバトルを取り入れたことによって、学習者間のインターアクションを増やし、学習者と支援者の距離を縮めることができたのは大きな成果であったと、ビブリオバトルにおける相互作用を報告している。

泉村・青山（2014）は、ビブリオバトルにおいて参加者が発表者とともに書評を紹介するゲームの構成員となっていることに着目する。参加者は発表者の発信した情報を受け止めると同時に、発表内容に関するフィードバックを発表者へ与えるという理解と共感に基づく双方向のコミュニケーションに従事している。泉村・青山はこの双方向のコミュニケーションを触媒として、参加者に主体的な参加を促す効果が生まれると考える。すなわち、ビブリオバトルが相互作用を促進する効果を秘めていることを示唆している。

## 5. 最後に

城野（2018）は多読の読後課題としてインターアクティブにリアクションレポートを書かせることが読みの改善に及ぼす効果を検証した。リアクションレポートに対するコメントをグループメンバーが互いに書きあうという互恵的な関係が読みの改善に最も強く関連していることが明らかとなった。すなわち、互恵的な環境下でリアクションレポートを書くような設定をすれば、読みの改善につながると言えよう。

本の内容を紹介する取り組みとして読み聞かせやブックトークに加えて、読書活動の新たなスタイルとして近年その注目を集めているのがビブリオバトルである。ビブリオバトルと言うと「チャンプ本」を選ぶ過程にばかり着目されるが、その相互作用を生み出す側面にも焦点が与えられるべきであろう。ビブリオバトルの創始者谷口が述べているように、ビブリオバトルの相互作用を促進する側面に着目して、相互作用を活かした取り組みにより多読の読後活動をより一層活性化することは可能と考えられる。

町・中谷（2013）によれば、グループ内の相互作用を促進するための方略としてグループの話し合いの構造化を挙げている。ここにおける話し合いの構造化とは、話し合いにおける手順の提示や役割付与により、学習過程を進行させることを意味する。町・中谷は質の高い相互作用を生起させるためには、教師がグループの話し合いを構造化するような枠組みをもって、意図的に介入することが必要としている。甲原（2016）は、LTDが構造化されたステップをもつ話し合いを通して、話し合いがより深まることを紹介している。構造化によって発表者は何をどのように話し合えばよいかわからないといった不安が軽減されることによって、話し合いや質疑応答に集中することができ、話し合いがより深まることが期待される。相互作用を促進する方略としてもう一つ考えられるのが外化＝可視化である。すなわち、本来外部から見えない読解の過程を他者との対話を通して外から見えるようにすることは相互作用を促進する要因の一つとされてきた（三宅，2000）。

ビブリオバトルのもつ相互作用の側面に着目し、発表者の話す内容を構造化することならびに読みの過程を外化＝可視化することによって、相互作用がどのように促進するのかを考察することは探求に十分値する課題と言えそうである。

## 注

- 1 2010年から2013年まで「ビブリオバトル首都決戦」と称したイベントは2014年以降「全国大学ビブリオバトル」と名称が変更されている。

## 参考文献

泉村靖治・青山禎尚（2014）. 学校教育の場におけるビブリオバトルの教育的利用の研究 兵庫県立教育研修

- 研究紀要第125集, pp. 39-46 <http://www.hyogo-ed.jp/~kenshusho/04kiyou/kenkyu-kiyou125.html>
- 伊藤恵美子 (2017). アカデミックライティングに向けてービブリオバトル導入の試み, 東邦学誌, 第46号第1号, pp. 80-95
- 甲原定房 (2016). 「LTD 話し合い学習法のアレンジと共同作業認識の変化」, 山口県立大学学術情報, 第9号, pp. 39-44
- 小島祐子 (2016). 「多読×ビブリオバトル」編集演習委員会『イマ×ココ 言語教育実践 イマ×ココ』, No. 4, P. 26-31, ココ出版
- 近藤雪絵・大賀まゆみ・山下美朋 (2015). 「自主的学習サイクルを生み出す場としての「英語でビブリオバトル」」, 立命館人間科学研究, 第32号, pp. 117-129
- 城野博志 (2018). 「読後課題としてのインターアクティブなりアクションレポートが多読に及ぼす効果」, 中部地区英語教育学会紀要47号, pp. 57-64
- 竹村雅史 (2016). 「多読から発話活動へービブリオバトルの試み」全国英語教育学会第42回埼玉研究大会予稿集, pp. 204-205
- 谷口忠大. (2010) 「書評の相互作用が生み出す語りのメディア：ビブリオバトル」, 日本シミュレーション&ゲーミング学会2010年度 春季全国大会, 110-113
- 知的書評合戦ビブリオバトル公式サイト：<http://www.bibliobattle.jp/home>
- 谷口忠大 (2013). 『ビブリオバトル：本を知り人を知る書評ゲーム』(文春新書901) 文藝春秋
- 町 岳・中谷素之 (2013). 「協同学習における相互作用の規定因とその促進方略に関する研究の動向」名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀, Vol. 60, 83-93.
- 三宅なほみ (2000). 「建設的相互作用を引き起こすために」植田一博・岡田 猛編『協働の知を探る』共立出版, 40-45
- 藤井一馬 (2017). 『英語多読のアウトプット活動としてのミニビブリオバトル』『英語教育』2017年11月号, pp. 24-25
- 藤田賢 (2018). 「英語多読授業におけるブックトークとしてのミニ・ビブリオバトル」, 中部地区英語教育学会紀要47号, pp. 127-132
- 吉野英知 (2014). 「ビブリオバトルが目指す読書推進の新しい形」『兵庫教育』(平成26年2月号) 兵庫県教育委員会, p. 6